

新
刊
紹
介

For some in ancient books delight,
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be though expert in both.

同志社大学人文科学研究所編「戦時下抵抗の研究Ⅰ」東京・みず書房、A5判三二四ページ、定価一三〇〇円。

自由主義者とは、軍部は困る困ると言いながら軍のあとについてゆく人のことで、クリスチャンとは、酒や煙草はのまないが戦争のためにお祈りをささげる人のことだ。これは、昭和十年代に私の中で育った「自由主義者」と「クリスチャン」の観念であり、昭和十年代の日本の思想史の脈絡の中でも統計的にはまちがっていないと思う。

「戦時下抵抗の研究」は、この統計上の例外であった実例をえらんで、記録をつくる。

た。抵抗と見れば抵抗とも見られるが屈伏と見れば屈伏とも見られるというようないまいな例をさけて、いかなる角度から見ても、抵抗であるような例だけをえらんで記述するという方法をとった。この点で、この共同研究は、戦後二十数年間になされたいくらかの抵抗研究とはつきりちがっている。次に、こうしてえらばれたまぎれもない抵抗の実例を記述することをとうしてあの戦争時代を生きた日本のキリスト者・自由主義者の全体を弁護しようという目的をもたない。これらの抵抗の実例が、少数例にすぎなかった事実を見すえて、なぜこれらが日本の自由主義者・キリスト者の間で少数例にすぎなかったのかを、現在・未来にわたって問いつづけるという目的意識にささえられている。ここには、謙虚さにとらえられた勇気がある。

戦争中にも戦争批判の雑誌を出し戦争批判の集会を開いて検挙された後にも屈しなかった元海軍機関学校生徒・無教会主義キリスト者の藤沢武義、エホヴァを唯一の神とみとめて天照大神その他を神とみとめず聖書の信仰によって一切の戦争を拒否し

た燈台社の明石順三、信条にもとずかない戦時下の教会合同に反対して検挙された聖公会の佐々木鎮次と須貝止、共産党員の集団転向以後の時代にもしろい小説の旗印によって国策文学にさからった『人民文庫』の編集者武田鱗太郎、日中戦争下に反戦の態度をもって大ぜいの人々に話しかけるための大衆週刊紙『土曜日』を編集した時代劇俳優斎藤藤雷太郎、左翼の全面的崩壊の時代に学生文化運動の統一戦線をつくらうとちの生き方が描かれる。

戦後の文化運動とちがって、同じように人間尊重の立場をいっても、戦時下では、言葉一つで自分の生涯を折りまげられる危険をもっていたので、世間にたいして発表する一つ一つの言葉に、かれらの生き方がこめられていた。多くのものは、その生命をまっとうしなかった。

そのために生命をなげうったにもかかわらず、かれらの非戦の信念は、戦後に生きなかった。それはなぜか。一つには、かれらの信仰が、社会状況をとらえる力をもっていなかったことによる。もう一つは、からの

活動した集団が、かれらの努力から何ものをもくみとろうとしなかったからである。

百人近い検挙者を出したホーリネス派は最高幹部米田豊・高山慶喜共著の『昭和の宗教弾圧——戦時ホーリネス受難記』を出したが、これによると、この弾圧は、北海道の若い伝道者見習が戦勝祈願の神社参拝をこぼんでとらえられ自殺したためにおこったものだそうであり、その伝道者見習の名も書かれていず、宗派全体が軍国主義に反対したということもないという。伝道者は小山宗佑という名の人だそうだが、その人は教団に迷惑をかけたという仕方だけ記憶され、その生き方が、戦後のこの宗派の活動に生かされたということはない。

灯台社の明石順三の場合、二六名が検挙された後、第一審の公判にさいして非転向組はもはや五人（明石順三、明石静栄、崔容源、玉応連、隅田好枝）となっている。この中で、明石の妻と崔容源は獄死し、隅田好枝は危篤となって出獄。そして生きのこった明石順三は、戦後の一九四八年に灯台社米国総本部から除名され一九六五年に死んだ。

この本の中で、私は抵抗者のその後の生涯の追跡と（今日にいたるまでのところの）その思想的不毛性の記録に、感動する。

このことにおいて、この共同研究は、これまでの進歩的学者の書物をこえるものとなっていると思うし、このことによって、日本の自由主義者・キリスト教徒にたいして再考をうながす力をもつものとなったと思う。死体の確認なくしては、復活への意志さえ起り得ない。

なお、疑問に思えることを一つ。この本は、日本の抵抗の系譜をヨーロッパ、とくにフランスとドイツとの比較において特長ぶりが、抵抗とは本来、むしろ東洋的なものではないのか。中国の歴史、日本の歴史は抵抗の先例にとほしくない。諫争による自決とは、反乱の道をえらばず抵抗の道を選んだということではないのか。この意味で、私は、この本に、ヨーロッパ偏重のせまさを感じる。

この本を全体として論評したが、この本の筆者を個別に列記すれば、次のようである。

和田洋一「抵抗の問題」、篠田一人「無教

会主義キリスト者の抵抗」、佐々木敏二「灯台社の信仰と抵抗の姿勢」、笠原芳光「日本基督教団成立の問題」、辻橋三郎「『人民文庫』の姿勢」、平林一「美・批評」「世界文化」と「土曜日」、郡定也「京都学生文化運動の問題」（鶴見俊輔）

武間富貴子（同窓会長・理事）著「クロースター日記」京都・同志社（同窓会扱い）
B6判二〇二ページ、頒価四〇〇円。

「クロースターで何ですか」と聞く人がよくあるから、はじめにそのことを説明してこう。「武間姉のご次男の住んでいらっしやるところの地名ですよ。」

「クロースター日記」は姉が一昨年七月一日羽田出発以来昨年三月十日羽田着までのヨーロッパ、アメリカの旅行日記を、もぢまへの丹念さから、しかも気楽に、書きとめておかれたものである。ただし途中、令弟のご永眠のため帰国された十月二十日から再渡米されるまでの一カ月半は抜かしてある。

はじめにヨーロッパのユーモア旅行記がある。この部分はさしえととも実によく楽しくて、ご本人はいそぎ旅でも読む方はニタ

りとしつつ返し読みをしたいほどになる。しかし『クロスター日記』の本命は何といつてもクロスターに本処をおいた本題にある。

ワシントン・D・Cからシカゴ、バーモント、マサチューセッツ、ニュージャージーを結ぶ楕円の中での姉の行動はすさまじくエネルギーッシュであり、シャープである。文中、モッサリオバチャマ、オバアサンなどと何度も自称されているが、それはどうもいただきにくい。

姉は訪問先で見聞きしたこと、もてなされたことに対していちいち感動される。感動した後、そのことを歴史的に地理的に、また経済的に能力的に分析される。次にそれを同志社に、その他にあてはめてみられる。そこには多くの示唆があることを読み取りたい。

姉は前後あわせて六カ月の滞米期間中に十の大学、十の教会、七つの美術館とそれに類するものを廻っておられる。その間、各地の同志社関係の会に出席して、スライドを見せ、話をし、同志社関係、その他の内外人を問安しておられる。普通なら気の

つかないところ、行けないところ、たとえばドイツのMBKミッション、アメリカの宣教師センター等まで行っておられる。もちろん新島先生ゆかりのヒドンハウス、

ピアソンホールはちゃんと見て来ておられる。こういうことは武間姉がただ人でないことを語っている。しかし、本の中のあちこちに、ひよいひよいと孝行息子さんが見えるのは、やはり姉のただ人であることをも語っているようで、嬉しくなる。

表紙画は姉が大和で探してこられた和紙にご自分で筆をふるわれたもので、しぶさの中に近代性がある。

この本には、もちろん、誰でも一度は行って見たいと思っているヨーロッパ、アメリカの名勝旧跡の見物記も出ているし、ブロードウェイのショーなど、若い人向きの楽しく記事まで出ている。だから一家中が廻し読みするといふ。

最後に、姉の訪問先を記した地図が挿入されてあれば錦上添花を添えたであろうに、誰にもなくひとりごとを言っていて、終る。

(中嶋静恵)

同志社時報 第29号

読物	一貫教育の問題……………宮井 敏
	アンケート・一貫教育……………教員 諸氏
	同志社への二三の苦言……………岩田 英彬
人物誌	「中島 重」……………嶋田啓一郎
	聖書翻訳の問題……………波木居齋二
歴史散歩	「長 岡」……………桜井乾一郎

随想・画と文・私の研究ほか

一部 100円 年6回発行